
ずっと大好き。

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ずっと大好き。

【Nコード】
N1102B

【作者名】
あくあ

【あらすじ】
涼子は心の隅で信じてた。彼がもしかしたら帰ってくるんじゃないかって……

最後に会ったのは3日前の火曜日

くだらないことでいつものように笑いあってた

何で笑っていたか……思い出せない

私は今、彼と2人で暮らしていたマンションに置いていた荷物を

段ボールに詰め、整理をしている

もうここには戻ってこられない……

ルルルル……ルルルル……

家の電話がなったので段ボールの箱にテープを急いで貼って受話器をとった

「もしもし……お母さん？」

母からの電話だった

「分かってるよ。今夜の8時にお通夜でしょ。……うん……大丈夫。」

母は心配をしてくれているのか、電話をかけてきた

「ありがと……ん。7時にはこっち出るから……じゃあね。」

ガチャ：

受話器を置くと、急に部屋の中がしんと静まりかえった気がした

ボーっとしたまま、電話の横の壁を見ると

私と彼が台湾に旅行に行ったときの写真を見つけた

「この時拓海、空港で止められてたな…」

『え？ストップ？なんでよ。』

拓海は係員に文句を付けていた

『あ……拓海もしかして、ライター持ってきた？』

私は心当たりのある物を拓海に聞いた

『ライター？当たり前だろ。』

『違って…ほら。去年私があげたピストル型のヤツ。』

彼は思い出したようにあゝと首を動かした

『あれがダメって？分かった分かった。』

係員にライターということを見せたが、結局置いていくことになった

「なんでわざわざ旅行にまで持っていこうとしたんだろ…バカだな…」

あの時、彼が私あげたプレゼントを大事に持っていてくれたことが無性に嬉しくて、あっちではしゃぎまくったんだっけ…

思い出に浸っていると、棚から洋服が落ちたらしく音がしたので振り返った

「そうだ。早く荷物片付けないと。」

いそいそと部屋の片付けに再び取りかかった

7時過ぎ、拓海の実家にタクシーで向かった

窓からは綺麗な星空が見えていた

「もうそろそろ雪が降りそうですね。」

タクシーの運転手さんが言った

「そうですね…もう11月ですもんね…。」

気づけば、拓海と付き合ってからもう3年…早いなあ…

7時30分頃、拓海の家に着いて両親にあいさつした

「おじさん…おばさん…」

「ああ涼子ちゃん…ゴメンね…ゴメンなさい…」

おばさんは涙をこぼしながら私に何度も何度も謝った

「おばさん…私、拓海に出会えて感謝してるんですよ？
そんな…謝らないでください。誰も悪くなんかありませんから。」

おじさんはおばさんをなだめて違う部屋へ歩いていった

「（おばさん…大丈夫かな…）」

私が本当は謝らなくちゃいけないのに…

拓海は私と出会ったことで、運命が変わってしまったかも知れないのに…

「涼子…」

「お母さん。」

お母さんが髪をぐしゃぐしゃにして駆けてきた

「本当に大丈夫なの…？あんだ…無理してんじゃないの？」

「そんなこと…しょうがないもん…」

母は視線を床にやって目を泳がせた

「お母さん…あんだ達が結婚してくれるの、楽しみにしてたのに…」
私だって、もうすぐ結婚すると思ってた…

「楽しかったよ。拓海といれて。」

強がりなんかじゃなくて、本当に楽しかった

通夜にはたくさん来てくれていて、

ふと悲しくなってしまった

ほとんどの人が帰っていった

おぼさんが、「涼子ちゃん…顔をみてやって…」と私を棺桶の前に進めた

「ごめんね。最後になっちゃって…拓海待ってる…。」

「はい…」

そっと拓海の前に歩み寄って顔を覗いた

「…………た…くみ…………？」

理解していたの。拓海がもう戻ってこないなんて事

愛してるって二度と聞けないことくらい分かった

でも…顔を見た瞬間頭が真っ白になった

この人は3日前まで私の横でテレビ見て大笑いして…

たまに喧嘩して怒って…

それでも私と愛し合っていたの

拓海は動かない…

私は信じていなかったんだ

拓海が死んだという現実を…認めていなかった

今日もあのマンションに行ったら

「涼子く聞いてくれよ。」

なんて、会社の愚痴を言い始めるだろうなんて

頭の隅っこで考えていたんだ

だけどその唇は真っ青で

もう二度と口がきけないことを私に伝えていた

一筋の涙がわたしの頬を伝う

「拓海…拓海!!!! 起きてよ!!! ねえ!!! 拓海!!!!…ねえ…」

おばさんが私の腕をにぎった

「いつもみたいに笑ってよ…私に好きだって言ってよ…拓海…」

頭がぐるぐるぐるぐるする

「どうしてよ…なんで私を置いていくの? いつとも一緒って言ったじゃん!!!」

気づくと私はおばさんの手を振り払って拓海の家を飛び出していた

「あああああ……あああああ…」

玄関で私は声を出してうずくまって泣いた

拓海への想いは、これから何処に向かって走ったらいいの？

拓海は、会社から戻ってくる途中で

トラックと接触した：

目立った傷はないのに、打ち所が悪くてあっさり逝ってしまった

2日間も会社でずっと仕事をしていたから、疲れていたのかもしれない：

通夜の後、もう一度マンションへ足を運んだ

「拓海…始めてここにきたときのこと、覚えてる？」

返事はない

「拓海泣いてたよね。涼子と暮らせるんだ！って…」

家の中で私の声が木霊して消える

「私も嬉しかった…今までで一番嬉しかった…大好きだったから…」

彼が後ろから私を抱きしめてくれた気がした

「拓海…ありがとう…私と一緒にいてくれて…」

「拓海がいなくなっても、私はずっと拓海を好きだから…」

「そっちが嫌だったら、いつでも帰ってきてね…」

拓海の温もりが消えていく

「しばらく会えないけど…待っててね!!」

私は一生2人の思い出を忘れない

この想いは次に会えるときまで大事にしまっておくの

拓海の分も生きるなんて格好いいこと言えないけど

拓海は私にかけがえのない物をいっぱいくれたから…

私は前を向いて歩いていける気がするんだ

ずっと大好きよ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1102b/>

ずっと大好き。

2010年11月1日10時32分発行